

埼玉大学経済学部同窓会

経和会会報

第5号

2002年5月25日発行

発行 埼玉大学経済学部同窓会
経和会会長 伊藤 正昭
編集 副会長 中野 恵永
さいたま市下大久保255番地
TEL 048 858 3281

大学改革のゆくえ

群馬大学との再編・統合の話し合い

埼玉大学経済学部教授・大学評議員 箕輪 徳二



視野に入れて幅広く両大学の『再編・統合』について話し合ってみようというところであり、『樺』二〇〇二(三)のことであります。これまで、両大学の学長懇談会は、一月二四日、三〇日、二月一八日、三月一八日と、双方の大学が交替で幹事となり開催されてきております。二月一八日には、教育学部問題、理工学部問題、共通教育問題が取り上げられ、話し合いがもたれた。いずれの問題も、各論について内容の違いが多く、具体的方向を展望するまでには至っておりません。こうしたなかで、群馬大学からは統合協議機関を早く設置してほしいとの、希望が出されましたが、埼玉大学では、統合について展望がもてる状況ではないとの理由から、留保している状況であります。

卒業生の皆様方が、それぞれの職場におきまして活躍されており、すこと心よりお慶び申し上げます。さて、同窓生の皆様は、『埼玉大学と群馬大学との再編・統合』について話し合いの学長懇談会がもたれているニュースに接して、埼玉大学は今後どうなるのだろうかという心配のことと存じます。

群馬大学との再編・統合 についての話し合い 学長懇談会の背景

そこで、なぜこのような学長懇談会がもたれるようになったのか、その背景から紹介します。文部科学省は二〇〇一年六月、大学(国立大学)の構造改革の方針を発表しました。その骨子は、①現在九九ある国立大学の数の大幅な削減を目指し、『再編・統合』を大胆に進める②国立大学に民間的発想の経営手法を導入し、独立行政法人に早期に移行する③第三者評価による競争原理を導入し、『トップ三〇』の大学を世界最高水準に育成するの三点であります。ここでの国立大学の数の大幅削減内容は、少子化による教員の新規採用減少をうけ教育大学・教育学部について規模の縮小・再編を進めるほか、地方自治体への移管の検討をするとし、医科大学などの単科大学に

一九四九年の新制国立大学の発足時、教育の機会均等を保障するために、『一県一校』原則が守られてきました。この度の『大学の構造改革の方針』は、国立大学政策の一大転換であり、戦前・戦後を通じての大きな国立大学改革となります。『群馬大学(医学・工学・教育・社会情報学部を擁し三キャンパスに分散)との再編・統合』についての話し合いは、こうした文部科学省の国立大学の改革を背景としており、同省は、六月一四日の国立大学学長会議で、『再編・統合』の大胆な計画をお聞かせいただき、最終的にはわが省の責任で具体的計画を策定したいとし、さらに、『努力が見られないと取り残さざるを得ない。場合によっては見捨てていかざるを得ない局面があるかもしれない』(H.一三.六.一五付埼玉新聞)と、厳しい見方を示しています。

群馬大学との 学長懇談会の現状

学長からの報告により、昨年一二月、群馬大学の学長から統合を視野に入れて話し合いの場を持つて貰えないかという申し出があり、今年一月一七日、評議会でも、『再編・統合』問題に関する両大学の学長懇談会を設置し話し合いを始めることについて了解を頂きました。統合を決めたというわけではなく、パワーアップの途をさぐるために、統合も

群馬大学との 大学再編・統合のメリット はあるか疑問?

学長は、この『再編・統合』のメリットとして①総合大学というにふさわしい教育研究体制をつくることのできるのではないか、②スケールメリットを生かして新たな教育研究領域の開拓もできるのではないか、③両大学は交通手段の利便性にめぐまれていることから既存キャンパスの活用が可能であることを述べております。

しかし、国立大学のその地域での配置は、その地域社会において必要な学問分野の高度の専門知識・技能・人間性を身につけた人材養成をする高等教育機関として柔軟に進化発展

して、社会(国民国家)の負託に込えてきております。それゆえ、埼玉大学としても、県境をまたぎ分散した学部、大学院等を追求すべきではなく、名目上とも見える総合大学になることではなく、真にその地域社会が必要とする学問分野の高等教育機関として、これまで通りの有為な人材養成を行うべきであり、埼玉県民とは、直接ほとんど関係が薄い医学部・付属病院等を総合大学としての名目のために統合する意味を見いだせないばかりか、将来独立法人

になった場合、その会計・財務が埼玉大学の財政に悪影響を与える恐れがあり、既存の学部経営を歪めることも懸念されるのであります。全国でも有数の人口を抱え今後発展が期待されている埼玉県唯一の国立大学として、県民のための高等教育機関として、その時代の変化、社会の要請に答えられるよう学内の教育研究組織について継続的に改革を進めてゆくの为先であると思っています。(意見のところは私の個人的な意見である)

平成14年度・経和会総会のご案内

一、日時

平成十四年七月十三日(土)

総会・講演会 13時30分(13時受付開始)

懇親会 15時30分(17時30分)

二、場所

埼玉大学・大久保キャンパス

さいたま市下大久保二五五番地

TEL 048(858)3281

総会・講演会 経済学部504講義室

懇親会 パーティー 大学会館3F集会室

三、会費

五、〇〇〇円

当日会場受付にて申し受けます

四、交通

JR京浜東北線「北浦和駅」または

JR埼京線「南与野駅」下車

いずれも埼玉大学行 終点まで

タクシー利用の場合

北浦和より約二、〇〇〇円

南与野より一、〇〇〇円前後

五、出欠連絡

「六月二十日」まで

同封八ガキにてご返事下さい

# 大学院経済科学研究科に博士課程

## —— 社会人教育の発展に向けて ——

前経済学部長 奥山 忠 信



今年四月から、埼玉大学大学院経済科学研究科に博士課程が設置される。悲願の成就である。

国立大学の人文社会系学部にとって、大学院博士課程の設置は特別の意味を持つている。どの大学にとっても博士課程設置が学部改革の究極の目標なのだ。旧七帝大などの有名大学を例外として、国立大学の人文社会系学部の多くは博士課程を持っていない。修士課程まで持って博士課程を持たない大学は、研究機関としても教育機関としても、完結しない。埼玉大学経済学部もこの悲哀を噛み締めていた。

博士課程の設置に向けた取り組みは、平成五年の修士課程設立と同時に始めた。大学院設立要求は、修士課程で終わるのではなく、本当のゴールは博士課程にあると考えていた。当時、新潟、金沢、岡山の三大学に博士課程ができたばかりであった。早速出向いて教えを受けた。三大学とも、法学部、経済学部、文学部、がひとつの博士課程を持つという形をとっていた。旧七帝大クラス以外の大学で博士課程を作る場合にはこのタイプをとることになる。今回の埼玉大学経済学部の博士課程は、単独で作る大学院博士課程なので、大学の「格」からすれば、破格の扱いである。

埼玉大学経済学部は、平成七年一月に、博士課程設置に向けて本格的に乗り出すことを決めた。今年で八年目ということになる。当初は単独での設置を目指した。しかし、当時の学長の考えもあり、教養学部と共同で博士課程を設置する方向へと転換した。私の学部長の期間は、率直に言っただけでまったく事態は進まなかった。学長選挙をめぐるごたごたにも巻き込まれ、話は中断する。

大きな転機点は、平成十二年の東京ステーションカレッジの設置にあった。埼玉の県境を越え、東京駅に隣接し、地下道を通れば傘を指さずに通える首都の真ん中に拠点を構えた。上は居酒屋、地下二階の小さな大学院教室である。国立大学なので、金の見通しはまったく立っていない。地上より地下の方が賃料が安い。社会人向けの夜の授業に窓はなくてもいいだろうと少々やけ気味の冗談を言いながらの出発であった。

これが社会的には予想外の反響を呼んだ。新聞、テレビ、雑誌が、次々と、しかも長期にわたって報道した。社会人教育を前面に打ち出したこと、東京駅という場所、そして、現職の官僚や一線の民間の現役の実務者が、客員教授や講師として参加したこと、これらが大きな話題を呼んだ。文部省（現文部科学省）の支援を得て、結局、賃料は全額面倒を見てもらうことになった。

現在、多くの大学が、東京駅への進出を目指し、社会人教育を行おうとしている。火付け役は、間違いなく埼玉大学経済学部である。われわれの先駆性は、高く評価されているものと考えられる。

博士課程の設置要求の際には、こ

の東京ステーションカレッジの成功が、決定的な意味を持つていた。これがなければ博士課程はありえなかった。概算要求の時期には、毎日深夜までの書類作りである。朝四時まで作って朝九時には文部省へ、という日もあった。しかし、博士課程がないという苦しみから逃れられるのだから、このぐらいは「何のその」である。

埼玉大学大学院経済科学研究科博士後期課程は、いわゆるビジネス・スクールではない。今日の人材育成のためには、何よりも創造性、人間性、そしてハイレベルの専門性が要求される。画一的な大学院教育だけが行われていたのでは、やや大げさに言えば日本の現状は打破できない。このためには、アカデミズムと実社会との協力関係が必要となる。理論と実践の融合である。官界・民間の一線の客員教授・講師陣と我々専任スタッフとの協力があつて、この目的が達せられる。われわれは新しいタイプの社会人教育によつて、日本をリードしようと、考えているのである。

若いときに学ぶことは大切である。しかし、大学は学びたいときにいつでも学ぶことの出来る場でない。学べない。学部に夜間主コース、大学院博士前期課程に二十四名の社会人定員枠、これに加えて、定員六名の社会人向けの博士後期課程が設置された。夜間の授業が整備され、社会人がいつでも学べる研究教育体制が出来上がったのである。

とはいえ、言うまでもなく相変わらず貧弱な設備を抱えての出発である。しかし、窓がなくても勉強は出来るし、外見より中身の問題、と言いつつ聞かせている。



## 寄稿

## 不思議な国タイとの縁

総合研究開発機構研究開発部長  
昭和56年卒 館 逸 志

早いもので大学卒業から20余年の歳月が流れました。この間不思議な縁でタイに2回赴任し、合計6年余の期間家族でバンコクに在住いたしました。一回目は経済企画庁から外務省に出向して、大使館員として勤務した91年から94年までです。

次はタイの役所にJICA専門家として赴任した98年から01年までです。

私のタイとの出会い、いやタイ人との出会いは86年ロンドンに始まります。その時私は幸運にもイギリス政府の奨学金を得て、ロンドン大学経済社会科学部(LSE)大学院に進む機会を得たのでした。

日本の役所での雑巾がけ生活から解放されて、久しぶりの学生生活に胸は期待で膨らんでいました。場所はマルクスが資本論を纏めたロンドン、寮は大英博物館にも近いインターナショナルホールで、そこには70ヶ国以上の学生が50人程生活していました。その中に日本人に似た顔をしてはにかんだような微笑を浮かべながら、いつも同国人同士で固まっているアジア人学生の小集団があり、彼らがタイ人学生だったのでした。

て返ってきたのは「君は何故そんなにロンドン生活が楽しいのか」という訝しげな表情でした。彼らの口から出る話題はいつもロンドンの鬱陶しい天候と寮のまずい食事でした。

楽しいような表情を見せるのはタイへの休暇帰国や本帰国後の夢を語る時でした。私のタイへの何とはない関心はこの時に掻き立てられたものでした。

88年、LSEでの留学生生活を終え日本に帰ってから、そんな不思議な国タイと仕事上のお付き合いが始まりました。偶々、帰国後の仕事を経済協力に関する業務だったので。当時、途上国の構造調整が開発政策上の大きな課題で、ESCAPでの構造調整専門家会合で小論を発表するためにバンコクを訪れました。

そこで見たタイは、抜けるような青空に、大渋滞の街中に熱気に溢れた人々の笑顔、それにスパイスの効いた食事、甘くてジューシーな熱帯の果物、色とりどりに咲き誇る花々など魅力でいっぱいでした。

その頃、日本企業のタイ進出ブームが正に始まったところで、日本人駐在員から伺ったタイの話もまた薔薇色の夢に満ちていました。そんな中に大学のゼミ(村川先生)で同級だった岩崎君(日野自動車)がバンコクに赴任していたのも奇遇でした。彼には熱暑の中、遺跡の観光地アユ



娘二人のバレエ発表会の朝  
(自宅アパート内庭にて)

タヤまで案内してもらいました。ブームに沸き経済の下、仕事は忙しいものの週末にはゴルフを楽しむ、メイド付きのアパートにはプール、ジム完備が当たり前という生活を楽しんでいるのは驚きでした。

人駐在員の優雅な暮らし振りを知って、ロンドンで会ったタイ人留学生の気持も容易に想像できるようになりました。欧米に留学するタイ人の家庭は裕福な家が多く、幼少の頃から使用人に傅かれながら育ってきている訳です。常夏の国には冬の寒さもなければ「田に稲あり。水に魚あり」といわれる肥沃な国土で飢えの苦しみもありません。タイ人の若者がそんなパラダイスから欧米に留学するのは、海外の学位がタイ国内でのビジネスや社交生活上大きな勲章となるからに他なりません。留学生活は苦しいけれども、学位を獲得して本国で栄達するための登竜門であり、厳しい修業生活なのです。

タイでの日本人の仕事・生活は私にとって未知の魅力に満ちていました。こうした経緯でタイ駐在に自ら手を挙げ、出かけることとなったのでした。これが最初のタイ赴任のきっかけです。

最初の赴任生活が期待に違わぬものであったことは、再度の赴任という事実が物語っています。

経和会にも多くのタイ駐在経験者やタイ人留学生がいらっしやるのではないのでしょうか。

埼玉大学はチュラロンコン大学との交流もありますし、実際の距離よりもとても近く感じる国です。

大学と経和会関係者で、一度タイ日友好会でも開きたいものです。

Mr. Itsushi TACHI

Director Policy Research Department

National Institute for Research Advancement

Yebisu Garden Place Tower 34th Floor, 4 20 3

Ebisu, Shibuya-ku, Tokyo, 150 6034 Japan



バンコク中心部にある  
エメラルド寺院

タイの上流階層や外国



# 経和会事業報告（平成13年度）

- 5月24日 経和会 会報第4号発行
- 5月30日 理事会（決算・総会準備・その他）
- 6月2日 経和会ホームページ作成打ち合わせ  
（インフォテック社・貝山学部長・並河教授・中野・内藤両副会長・北村理事出席 学部長室にて）
- 7月7日 経和会 平成13年度総会  
（埼玉大学キャンパスにて開催、奥山前学部長が講演）
- 7月24日 経済学部就職セミナー（中野・内藤両副会長出席）
- 11月27日 インターンシップ報告会  
（伊藤会長・中野副会長出席）
- 12月7日 就職セミナー講演（学生部主催、中野副会長）
- 12月21日 拡大常務理事会  
（大学側から学長・学部長など4名出席）
- 2月5日 就職相談室利用学生座談会  
（学生部主催 中野・内藤両副会長出席）  
経済学部と打ち合わせ会  
（伊藤会長・両副会長・大学側学部長以下4名出席 合併問題等につき情報交換）
- 2月21日 理事会（大学側から貝山学部長ほか3名出席）
- 3月25日 経済学部卒業パーティー  
（伊藤会長・中野・内藤両副会長出席）

## 新入寮生歓迎コンパ

昭和三十三年三月埼玉大学受験の前夜に蒼玄寮に初めて泊した。従兄弟の金井の部屋が、三百人の自治寮の三役寺井・五十嵐先輩の十五畳部屋で、後で思うとよく整理整頓されていたが、木造二階の寮の印象は何かわびしく暗いものであった。

桜の咲く頃、草刈先輩の部屋に入寮した。夜になるとヨット部の仲間が集まってきて、歓迎コンパが始まった。洗面器のもつ煮と飯盒の白飯である。酒に酔わないととても著をつけられる代物ではないが、皆実に美味しそうに食べ、お前も食べる食べると勧める。あげくの果て誰かが、この洗面器で今朝パンツを洗ったぞと言うのを聞いて、吐きそうになるのを堪えて何気なく飲んで食べた。

**深夜の寮生大会**  
生活部が自主運営する食堂の三食は、一日七十円であった。最初

は抵抗があった麦飯も堪らなく待ち遠しくなり、夕食は五時に済ますので、夜九時過ぎると腹が減って堪らなくなる。ここで何かにかこつけて前述のようなコンパをやり、後は金がなくとも仲間からかき集めて、北浦和で痛飲して方々へストームかけた。

## わが青春の蒼玄寮

昭和37年卒 岩井節夫

事代は約二千元。家庭教師のアルバイトと奨学金で何とか自活できるで、当時まだ経済成長前の貧しい郷里の親からの仕送りを当てにせずに頑張っている寮生が多かった。

それが一日七十円から八十円に値上げする提案が寮生大会に諮られた時は大変であった。折しも警職法反対・安保反対の最中で、「資本主義矛盾から...」、米帝国主義や国家独

占資本主義の議論から始まり、夜のアルバイトから戻った寮生も加え、二百数十人を越える寮生大会は深夜に及んでも決着がつかず、採決の結果、一票の差で否決された。

その後所得増進計画の池田内閣の頃には一日三十円値上げ案がすんなりと可決され、何となくつまらなくなりました。

## 寮祭や期末試験の思い出

寮生にとって寮祭は最も楽しい行事の一つであった。一、二年生の頃は皆全精力を寮祭に投入する。特に企画準備やフォークダンスの練習のため男子禁制の悠元寮へでかけることが当時は新鮮な楽しみであった。

青春の限りをつくした寮祭が終わると何組かのカップルができ、卒業すると直ぐ結婚した。小生のように

# 同期会紹介

5

## 三十七年の仲間たち

昭和37年卒 榎本盛忠

### 一、その昔

小学校の恩師が我々に贈った送別の辞は次の様であった。「諸君はこれから、進路も異なり、社会人としても別々の人生を歩むことになるが、このクラスで育んだ友情を一生涯変らぬよう持ち続けてほしい。一方が大臣、一方が乞食になったとしてもである」

### 二、現況

たった六十名のクラスであった我々も、卒業以来互いに多忙で、皆一堂に会する機会は少なく今迄に数回実施したのみであった。しかし、我が国の高度成長期に企業戦士として活躍した仲間達も還暦を過ぎ、これからの三十年を如何に生きるかを

真剣に考える年代になって来た。

今でも現役で活躍している人、ボランティア活動、趣味に生甲斐を見出している人等、様々であるが、何となく昔の仲間に出会ってみたいと言う気分が盛上って来た。

そこで矢口氏が世話役になり糸日谷、岩井氏の協力を得て、大手町にある、デイトナイトに年二回のペースで集まることになり、今年三月で第五回を迎えている。

当初の主旨は、気軽にチョット集り、ダベリましようとのことで、出欠も取らずに始めたが次第に懐かしい顔見たさに、回を重ねる毎に盛大になり、平均出席者は二十名、出席率は三分の一に達するに到った。同級生とは良いもので、会えば互いに年を取ったことも忘れ、お前、俺の間柄になつて居る。話題は二人のマトンナ（奥谷、松本両嬢）を中心に寮生活、ゼミ、単位を落した事等尽きることはない。

### 三、反省

「縦横十文字の規矩」と言う弓道用語がある。足腰、背柱を軸とする縦の線と、左右を支配する両肩、腕の組合せで自然体を保持することを言う。

これを埼玉大に当て嵌めれば、縦は同窓、横は同期、これが一体となり埼玉大を構成していると言つことである。我々の年代もこの十文字関係をもつ少し深め、幅広い交流をすべきではなかつたかと反省している。

現在産業界に於ては異業種交流が盛んであり、この中からヒント、アイデアを得ようと必死に努力している。我々埼玉大に於ても先輩、同期、後輩の交流が今の様に盛んであったなら互の仕事にもっと貢献出来たのではないかと思つたりもしている。

しかし同窓、同期会は互に利害関係がなく同等の立場であることが基本であり、この線を崩してはならないことは言う迄もない。

## 編集後記

いきなり新聞に埼玉・群馬の両大学の合併話が載つてしまい驚かされた。驚いたのは同窓生だけでなく教授達も寝耳に水だつたらしい。

現在進行形で結論が見えているわけではないが、これ程の関心事を放っておくわけにもいかず、箕輪先生に現況を論じていただいた。

大学院の博士課程は快挙である。ステーションカレッジといい、今回のドクターコースといい、経済学部は実に積極的である。こうした努力が大学改革の嵐の中で、生き残りの大きな支えとなるのだが、実は非常に困難な厳しい仕事なのだ。

奥山先生にはそのご苦労の一端を披瀝していただいた。

37年卒の岩井氏、榎本氏にそれぞれ思い出を綴っていただいた。

56年卒とぐつと若い館氏にご登壇いただいたのは嬉しいことで、これを機に若手の参画が盛んになることを願っている。ホームページも出来たことだし、年代を超えたコミュニケーションの活発化が望まれる。